



Be creative !



6月-忘れ得ぬ日・人



6月と言うと、私は「忘れ得ぬ人」、本校を創設した鈴木修学先生を思い浮かべます。6月6日は本校の創立記念日です。毎年、前日に全校放送を行ってきましたが、今年は、校長室だよりを通して修学先生をしのびたいと思います。

先見の明を持ち、社会の差別と偏見に立ち向かった修学先生

私たちはコロナウィルスという目に見えない、しかしながら強力な力を持ち続ける脅威と、日々、静かに闘うという経験をしてきました。状況が正しくつかみきれず、患者の皆さんや、その家族の人々が、社会からの差別と偏見に苦しむ状況が多く見られました。全国で一斉休校の取り組みが行われていた頃、本校の生徒ではありませんが、コロナに罹り、いろいろな人のうわさに耐え切れず、「あの子はどうも学校を退学したらしい…」そんなうその情報がまことしやかに地域の中で語られたりもしました。その情報を不安に感じ、コロナに感染した生徒の親御さんが、涙ながらに「どうぞ、この子が学校を辞めなくてもいいように、取り計らってほしい。」と嘆願されることを私は経験しました。「わからない」ということのなんと不安なことか、そしてその不安が社会にうみ出していく差別や偏見のなんと恐ろしいことか、この科学の進んだ21世紀の社会においてすら、人間の心から「差別と偏見」を消し去ることは難しい、そのことを思い知らされる日々でもありました。



そうした状況の中で改めて修学先生の生涯を振り返ってみると、先生の未来を見通す力、その先見の明に敬服する思いです。ハンセン病の患者と生活をともにし、彼らの人権と生活を守ることに苦心惨憺された先生。先生はまた、知的障害を持つ子どもたち、戦災で親を失った子どもたちの豊かな成長を考えられ、彼らの親となる決意をされます。

子どもたちの心を深く理解する人、それが修学先生だった



本校の生徒の皆さん全員が読んだ『日本の福祉を築いたお坊さん』、その中にこんな一節があります。修学先生が、第二次世界大戦後、運営の中心を担っていた児童養護施設に住むある少女のエピソードです。

その少女は毎月もらう小遣いをコツコツと貯めていました。保母たちは何を欲しがっているのか不思議に思い、その子に尋ねるとこう答えたのです。「お金をためて、お父ち

ちゃんとお母ちゃんを買いたい。」保母たちは思わず言葉に詰まります。1 年が過ぎたころ、「お金がたまったら、町に行ってお父ちゃんとお母ちゃんを買ってくる。」何と言っていいのかわからない保母たちは、町に出かけるその子の後ろ姿を黙って見送りました。夕方、その少女は施設に帰ってきます。帰ってきたその子の胸にはお父さんとお母さんの名前が刻まれた位牌が抱かれていました。修学先生はそっとその子を抱き寄せたと言います。この子の人間としての賢さを先生が受け止めた瞬間でした。修学先生の深い子どもへの愛を感じるエピソードのひとつです。

現在もなお、世界では戦争や貧困が絶えません。この惨禍で、父や母を失った子どもたちがどれだけ増えたことでしょう。今、修学先生が生きていらっしゃったら、この世界をどのような思いで受け止められるのだろうかとは考えます。この少女のように戦災で親を失った子どもたちをはじめ、社会の中において弱い立場にいる人々の豊かな成長をどう作り出していくのか、先生は懸命に考え、実践をされました。

我が如く等しくして異なること無からしめん

先生はやがて、これからの社会には、科学的な知識を持ち、様々な社会的な課題を担っていく「専門的な学び」を修得した人材が必要になってくると考えるようになります。先生が創設された私たちの学園には、豊かな未来社会建設に向けての、修学先生の切なる希望と願いが詰め込まれています。時に、君たちのいたるぬ行動を指して「福祉を学んでいる学校でどうして…」という批判がされることがあります。そのことを理不尽に感じてはなりません。私たちは普通科の高校ではありますが、建学の精神の中にすべての人々の幸せを築くという指針があり、それは私たちの学びや生活の基盤にしっかりと位置付けられているのです。いわば、そうした社会的な使命を持つ存在として、社会から期待されている人間として、しっかりと自覚して生きていくことが修学先生の思いに応えることになります。

本校の建学の精神の一節です。「単なる学究ではなく、また、自己保身栄達のみに汲々たる気風ではなく、人類愛の精神に燃えて立ち上がる学風が、本大学に満ち溢れたいものであります。『我が如く等しくして異なることなからしめん』と欲す」これぞ本大学学徒等の、魂の奥底に鳴り響かすべき、真理追究の基調でなければならないのであります。」

6月もう一つ忘れてはならぬ日—6月23日 沖縄慰霊の日

6月と言うと、もう一つ忘れてはならぬ日として6月23日、沖縄慰霊の日が浮かびます。私たちの学校が初めて修学旅行で沖縄を訪れたのは2000年9月11日でした。この修学旅行で私たちは、沖縄戦の語り部である安里要江(あさととしえ)さんと出会います。台風上陸の最中、高校生のために駆けつけ、この戦争がどうして始まったのか、住民たちはどのように逃げ、何を思って戦禍を潜り抜けていったのか、ご自身の体験を中心に語っていただきました。この時の生徒たちの真剣な顔は忘れません。2時間の講演を彼らは真正面から受け止めました。事前学習にも懸命に取り組みしました。グループに分かれ、テーマを決め、発表をした彼らの中に「沖縄戦による住民の集団自決」を取り上げたグループがありました。彼らの結論です。「調べていく中で、大きな疑問が



浮かんできました。『集団自決』という呼称は間違っているのではないかと言うことです。好んで死を選んだ人はいません。自ら進んで家族を殺そうと思った人もいません。ガマに隠れ、飢えをしのぎ、日本兵の言うことに忠実に従ったのが住民たちだったのです。『自決』という表現で片づけてはならないと強く主張します。」25年たっても忘れられない生徒の発表です。

